

# IC NEWS No.118

発行年月日 2008年4月8日  
発行所 (社)国際IC日本協会  
〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-54-14  
Tel:03-5429-1156 Fax:03-5429-1157  
E-mail:LEB03055@nifty.com

発行人 矢野 弘典  
編集人 長野 清志  
頒 価 1部 200円

## 《追悼》 相馬雪香名誉会長を偲んで

～「自分から変わることによって社会を変えよう」と  
96歳まで生涯現役を貫かれた女性～



昨年11月8日に永眠された相馬雪香国際IC日本協会名誉会長を偲び感謝する会が、去る12月25日に国際IC日本協会を含む12団体の共催で憲政記念館にて開催されました。第一部の追悼式の会場となった講堂の壇上には、天皇・皇后両陛下より賜った生花が中央に置かれ、多くの美しい生花に囲まれて相馬雪香名誉会長の写真が掲げられました。700名余りの参列者を代表して、先ず、三笠宮寛仁親王が弔辞を述べられました。相馬名誉会長のご家族が使われていた「ブーバ」の愛称

を使われながら、「ブーバの一生は、社会貢献活動のお手本でした。MRA運動に始まり、難民を助ける会、そして、尾崎記念財団のお仕事を中心に、数多造り出された社会啓蒙活動の幅広さは、誰にも勝つことが出来ない大きさと深さを我々に教えて下さいました」、とその働き振りを賞賛されました。続いて、麻生太郎総理も、「戦前からMRAに参加され、運動の根底にある『他人を変えるにはまず自分が変わる』という考え方を精神的な支柱とされ、戦後はさまざまな国際社会に貢献する運動に尽くされてお

### ■主な内容 Contents

#### ◇相馬雪香前名誉会長追悼特集

橋本 徹 / 和田アドリエンネ 他——1P

#### ◇日本ミニHOHOレポート(箱根)

高橋 衛 他——6P

#### ◇オーストラリアIC<ライフ・マターズ・コース>

ジェームズ・コーディネーター——9P

#### ◇インドIC<ボランティア体験>

チェ・ヒジン——10P

◇ICニュース他——12P

ります」と述べられました。また、日野原重明聖路加国際病院理事長も、相馬名誉会長のMRAとの関わりについて詳しく述べられ、故人の世界平和に向けての努力を讃えられました。

MRA(現IC)の長年の友人であるインドのラジモハン・ガンジー氏(マハトマ・ガンジーの孫、イリノイ大学教授、ICインターナショナル会長)、そして、カンボジアのソン・スーベル氏(カンボジア勅撰憲法審議会委員)からのメッセージも読み上げられました。サロンに移って開かれた、第二部の感謝する会では、最初に橋本徹国際IC日本協会前会長の弔辞が捧げられました。皇后陛下もご臨席され、共に故人をお偲びになりました。各界からの参列者の多彩さと相馬名誉会長がリードされてきた様々な団体の用意したパネルからも、改めてその活動の広さと深さ、そしてその足跡の大きさを感じさせられました。

#### イエーツさんの来日

世界のICを代表して相馬名誉会長と50年余にわたる親交のあったノルウェーのイエーツ・ウイルヘルムセンさんが来日され、この式に参列されました。終戦後の日本でMRA活動に長く従事されたイエーツさんは日本に友人も多いため、イエーツさんを囲んでの相馬名誉会長を偲ぶ会を国際IC日本協会主催で12月27日に京王プラザホテルにて開催しました。年末でお忙しい中、駆けつけて下さった友人たちに対し、イエーツさんは次のような話をされました。

「一昨日、雪香先生とその業績が大いに認められたことを目の当たりにしてとても感激しました。それは、“日本と近隣諸国の和解、窮状にある人々を助けるために一人ひとりが何かを犠牲にすること、それぞれが自分自身を変えることから始める”という雪香先生の目指したことの重要性が認められたことでもあります。雪香先生とご主人の恵胤さんには1948年にドイツで初めてお目に掛かりました。お二人で最後にされた長い旅行の際には、ノルウェーにも来られました。その間の50年の間には数え切れないほどの旅をされました。雪香先生は、世界に融和をもたらすための神の道具として自分が使われると自覚されていました。現在のグローバルイゼーションが唱えられるずっと以前から世界人でいらしたのです。

ICのホームページの一番上には、“世界の分裂に信頼の橋を架ける”という標語が掲げられています。2004年の6月に、“日本はまさにこのことができる国だと思います。しかし、日本の最大の問題は、盆栽文化の如く、矮小化してしまう癖があることで、日本のICも常に世界をベースにして考えなくてはなりません”というお手紙を頂きました。今日世界中が不安定さを増しています。経済危機により、多くの人が職や家を失うのではないかと恐れおののいています。地球が汚染により住めなくなってしまうのではと危惧しています。これらのチャレンジには精神的な側面、つまり、人間の貪欲さと関わりがあるのではないのでしょうか？ 経済構造を変えると共に人間の貪欲さにも対処しなければなりません。私自身の中にも、地位や成功、あるいはいつも注目を浴びたいといった強い欲望が存在していることに気づいています。それが原因で、妹に嫉妬したり、一緒に働くのが難しいと思われる人間になってしまったりということがあったのです。これは私の人間性の一面であり、これまでの人生でその克服のためにずっと苦勞して取り組んできたことです。まったく反対の誘惑に駆られる人たちもいるでしょう。私の妻は、自分には荷が重い、自信が無いなどと感じて、穴に隠れてしまいたいという誘惑に駆られます。これら人間の異なる衝動や情熱があるからこそ、朝、“静かな時間”をもって自分の考えを書き取ることが重要となります。衝動は光を当てられ、それがどんな衝動なのか鮮明にされると、その力が弱まります。かつてはそれを“罪”と呼んでいました。どう呼ぼうと構いませんが、それをはっきりと見ること、そしてそれを認めることは、たとえ自分の妻に対してであつてもたやすいことではありません。もちろん“静かな時間”はそのことにとどまりません。フランク・ブックマン博士は、“人間の知恵では立ち行かない。静かに心の声に耳を傾けることで、より高い智慧とつながることができる。このやり方でのみ人類は未来に続く最善の道を見出すことができる”としばしば言われたのです」…

年末・年始の来日でもあり、多くの友人にお会いできなかったことを残念がられながら帰国されましたが、この誌面を通してお会いできなかった方々へのご挨拶としたいとのことです。

## 相馬雪香先生を偲んで

橋本 徹（国際 IC 日本協会 前会長、現名誉会長）

私が最初に相馬先生にお会いしたのは、7年前の2001年のことでした。その年の春、当時国際 MRA 日本協会の会長をしておられた相馬先生が、MRA 推進議員連盟のリーダーである元総理の羽田孜先生と、元法務大臣の谷川和穂先生を介して、私に MRA の会長職を引き継いでほしいと仰ってくださったのでございます。MRA は、米国人のフランク・ブックマン博士が1938年に提唱された平和運動でございまして、「あらゆる民族、国籍、宗教の枠を超えて、赦し、癒し、和解の心で、それぞれの社会、そして世界をよりよく変えていくこと」を目指しております。私は、この活動に心から共鳴し、喜んで、MRA の会長職をお引き受けしたわけですが、これが私の相馬先生との最初の出会いでございました。その後も相馬先生には MRA の名誉会長として、亡くなられるまでにご指導を頂きました。

相馬先生は1939年にあるアメリカ人女性を通して、この MRA に出会われたとのことでございます。「戦争は嫌だ、平和を願っている、とあなたは言われるが、あなたご自身は周囲に平和を作り出そうという努力をしておられますか？他人を責めてばかりいて、何か得られますか？世の中で、自分の意思を思い通りに反映で

きるのは自分しかありません。人を変えようと思ったら、先ず自分を変えるべきです」との言葉に納得され、ここから、ご主人やお姑さんへの態度を改める等の自己改革を始められました。この自己改革を通して、「誰が正しいか」ではなく、「何が正しいか」を判断の基準とするようになられたそうです。ブックマン博士から、「ピース・メーカー（平和の創造者）になろう」という目標を与えられ、戦争が終わったら、世界中の MRA の人々と力を合わせて、戦後世界の再建に尽くそうと考え始められたそうです。

戦後、まだアメリカの占領下にあった1948年に、相馬先生はご主人の恵胤氏と共に、アメリカやスイスでの MRA 国際会議に招待されました。その後、MRA のグループと共にドイツに赴かれまして、フランス労働党の婦人部長であったマダム・ローがドイツ人に抱いていた憎しみについて謝罪する感動的で歴史的な和解をまさに目の当たりにされました。アジアの国々を日本が蹂躪したこともこのとき初めて知られたそうです。このことが、フィリピンを始め、戦争により対日感情が悪化していたアジア諸国の人々との和解に一貫して努めて来られた原点になったのだと思います。この9ヶ月の旅行から帰国された後、MRA の活動やその



「相馬雪香さんを偲ぶ会」にて先生の遺影を持つイエンツさんと橋本徹氏（右隣）

他の社会活動に専念してられました。

1950年のスイスでのMRA世界大会には、若き日の中曽根康弘氏ほか国会議員、石坂泰三東芝社長を始め、政・財・官・労働界から70名もの戦後初めての大型代表団が招待されました。「このヨーロッパ行きは、敗戦で完全に自信を失くし、喘ぎ喘ぎ生き延びてきた私たちに、世界の中で胸を張って生きていく自信を蘇らせてくれた」と参加者の一人は語っています。相馬先生はこの会議で、当時は不可能と思われていた日英の同時通訳も西山千氏と共に初めて行われました。

1978年、相馬先生はカナダのMRAの友人からある手紙を受け取られました。「世界が、今、一番関心を払っているインドシナ難民に日本はなぜ冷たいのか」という内容の手紙でした。この手紙をきっかけに難民救済活動に邁進されたのを始め、日韓の女性同士の親善活動等に尽力され、常に「日本を世界の孤児にしてはならない、世界から尊敬される国にしなくて

はいけない」という信念に基づいて活動の歩みを緩められることはありませんでした。「人生の本舞台は常に将来に在り」とのお父上、尾崎行雄先生の教えを、文字通り実践されたのであります。そのためには、常に広くアンテナを張って世界の動きを知らなくては行けないと、5年前まで毎年のように、スイスでのIC世界会議に参加されていたのを始め、世界各国でのIC活動に参加しておられました。相馬先生は、まさに日本と世界を繋ぐ大きな架け橋であり、相馬先生を喪ったことは、日本のみならず、世界にとっても大きな喪失であると言えます。

私どもも「一人ひとりに何かできることがある」という相馬先生の教えに従って、少しでもより良い平和な世界を次の世代に渡していけるよう努力していくことをお誓い申し上げまして、相馬先生への哀悼の言葉を結びたいと思います。

## 相馬雪香さんの思い出

和田アドリエンネ

相馬さんは私にとって60年もの間、大切な友人でした。私は1948年に長男と共にヨーロッパから日本の主人のもとに来たのですが、10年間を過ごしたインドネシアのジャワ島で戦時中は様々な体験をしました。インドネシアは当時オランダの植民地で、白人は植民地意識が強く、使用人には親切にしていたものの、知識人以外の現地人と交わることはありませんでした。そのために、初めて来日したとき、私は日本人に対して同じ様な意識を持っていました。また、インドネシアは戦時中日本の占領下であって、多くの日本人に出会いましたが、日本に来た当時は、強いカルチャーショックを経験しました。

来日前は、日本について学ぼうとしませんでしたし、夫も戦後の日本の状況を教えてくれませんでした。日本の食生活も、ライフスタイルも、私がそれまでに体験したものとは全く異なっていました。日本政府に婚姻を認められていなかった日本に来る決心をしたのは、結婚に対してとても強い確信を持っていたからで

す。また、「静かな時間」を通して、様々なことを決心し、確信を持って行動することは、19歳のときに出会ったオックスフォード・グループ(MRAの前身。MRAはICの以前の名称)に深く影響を受けたからです。このとき、希望と信仰を持って生きること、そして、自分自身以外の強い力が自分を動かしていることを知りました。戦時中、様々な困難の中、「静かな時間」を持ち、内なる声に耳を傾け、それに従って行動すると、必ず良い結果がついてきました。

来日してすぐに、オックスフォード・グループを探したところ、MRA、そして相馬さんに出会いました。相馬さんとの出会いで、自分が大きく変わることになりました。相馬さんと自分は、人生の基盤が大変に異なることに気が付きました。私はその当時とても傲慢で独善的で批判的でした。そのために日本人の気持を理解することが出来ませんでした。また、戦時中の知人や家族の体験から、日本人に対して嫌な思いも持っていました。このことを恥じるようになり、相馬さんにそ

の思いを打ち明けました。相馬さんは即座に、私が次にやらなければならないことは何なのかを問われ、その思いを正直に日本人に打ち明けるよう助言してくれました。もともと相馬さんとの出会いに導いてくれたのは、ミス・ヘンティというイギリス人の女性でした。ミス・ヘンティは、都内で英語の教師をしていましたので、彼女に連れられ、多くの教室を訪れ、学生の方々に謝罪をして回りました。その思いが本気であれば、行動に移さなくてはならないと思ったからです。

そんなある日、MRAの会議があると聞きましたので、会場を訪れたところ、2000人余りの参加者は皆日本人だったので、楽屋にいる相馬さんを訪ねました。相馬さんは突然2000人の聴衆の前で、自分の話をすよう促しました。今まで、少人数の教室で学生だけを相手にしていた私は、愕然としました。それでも相馬さんに手を引かれて、誰もいないステージの中央に連れて行かれました。でも、その時の私は、どういわけかとても冷静で、相馬さんに通訳をしてもらいながら、心の内を話すことが出来ました。私が体験した苦難や心の痛みを打ち明け、その様なことが二度と起こらないよう、日本人の方々と共に平和作りに打ち込むことを約束しました。ほんの数分のスピーチでしたが、私にとって強いインパクトがありました。

その後も様々な葛藤がありました。日本の文化を簡単に受け入れることが出来ず、子供たちが日本の文化に影響されないようにとアメリカン・スクールやドイツ学園に行かせたこともありました。また、人を第一印象(行動、服装、話し方)で判断することもありました。多くの間違いを犯しましたが、私の人生は、金の糸でずっとつながってきました。そして、人生の決定的瞬間に、いつも奇跡が起き、救われました。

相馬さんは度々、ご自身の人生や苦悩について語っ



相馬雪香さん(右)と共に。和田アドリエンネさん(左)

てくれました。相馬さんが軽井沢へ引っ越すまでは、毎日のように電話がありました。相馬さんは私にとってかけがえのない友人でした。私たちの多くが、長年にわたり相馬さんの思いやりのこもった友情を受けてきました。そして、相馬さんは、小さな世界から出て、より大きく考えていかなくてはならないという挑戦を常に私たちに投げかけました。

私が1948年に初めて相馬さんにお会いしたとき、彼女の正直さ、謙虚さ、大きなビジョン、そして、日本の将来に対する情熱に心を大きく動かされました。相馬さんは、戦時中、日本が他国に与えた苦悩と痛みに対して謝罪し、日本とこれらの国々との間に信頼と友情の橋を築いていくことを生涯の仕事とされてきました。そのために相馬さんは人や組織や政府に常に勇気を与えてこられた素晴らしい女性でした。自分の失敗や間違いに関して、正直に心を開いて話してくれました。そのことが、周りの人たちに勇気を与え、人生の変革の元となり、新たな展望をもたらすことにつながったのです。



スイス・コーでアジア・太平洋諸国からの友人たちと(1948年)



フィリピンのマグサイサイ大統領ご夫妻と(1955年)



スリランカのジャヤワルデネ大統領と(1984年)

## ◇第13回ミニHOHOレポート

去る2008年11月15、16日に第13回ミニHOHOが箱根・富士箱根ゲストハウスで開催されました。

「人生の転換点」「心に残る出会い」「自らの人生をふり返って」の3つのテーマで少人数のグループに分かれて「ストーリーテリングと傾聴」が行われました。また、年間で世界50カ国約5千人のゲストを受入れている富士箱根ゲストハウス代表の高橋 正美氏からは、「国際観光に求められる人材育成について」のテーマで国際観光を軸に教育・文化・社会奉仕活動にも及ぶ幅広い実践と成果等についてお話し頂きました。また、高橋 衛 氏（ドイツ証券常勤監査役）には、「真の国際人、真の日本人とは？—海外6カ国に暮らして—」をテーマに多様な国々で長く生活した経験に基づきその地域に固有の文化や価値観等について、比較対照しながら独自の切り口でお話し頂きました。

## 真の国際人、真の日本人とは？—海外6カ国に暮らして—

高橋 衛（ドイツ証券常勤監査役・国際IC日本協会理事）

### ◆タカハシの法則、マモルのルール

タ・カ・ハ・シのタは体験のタ、カは感性のカ、ハは伴侶、シは信頼のシです。それからマ・モルのマは、マーケットのマ、モラルのモ、ルールのルです。

7カ国での海外生活というのは、私が住んだ順に言いますと、中国、ポルトガル、ブラジル、フランスが2回、ベルギー、ドイツが2回、そしてアメリカです。ちなみに富士銀行のギネスブックには36回引越しをした引越し王として私の名前が載っております。

### ◆フランス人の愛国主義

私がフランスとドイツとアメリカで主に体験したことからお話させていただきます。

私がフランスに居た頃、直間比率の間接税が高く、60%が間接税の比率でした。ちなみに当時車には33.3%、TVには28%の高率の付加価値税がついていました。なぜフランスでは間接税の比率が高いのでしょうか。私の答えは、「フランス人は愛国者であるから」というものです。どういうことかと言いますと、日本と違い、フランスでは「愛国者」とか「国益」という言葉が使われることは日常茶飯事です。

毎年パリに来る観光客は6000万人位で大半が非居住者です。観光客はホテルに泊まり、レストランで美味しい食事をとると、各々18.6%程度の消費税が

取られますが、大多数のお客はそのサービス内容と味に満足し喜んで支払っております。

この消費税の高さはどういうことかという、外国人からガンガン税金を取っている訳です。それで税金を取った上で、まだ足りない、足りない分だけを、「これだけ足りないので申し訳ないけれども我が愛する国民よ、悪いけど直接税で払って頂戴」という論理なのです。フランス人は愛国者だからなるべく外国人や最近では外国企業を誘致して税金をガッポガッポ取って、しかも美味しい食事を提供して不満を言わせない。これがフランスの愛国的なところではないかと、若干一方的な解釈かもしれませんが私の見解です。

### ◆ドイツに有料道路がない理由

ドイツには、有料高速道路がありません。日本と違い高速道路での渋滞もなく、1時間100キロで走ることが標準的になっています。

ではなぜドイツでは有料道路を作らないのでしょうか。それは、ドイツ人は非常に合理的に考える、納税意識の高い国民だからだと思うのです。高速道路を有料化すると毎年維持費や人件費がかかり、将来のコストが読めない。さらに料金所ができる、1時間100キロでは走れなくなり、渋滞が発生する、ゆえにガソリン代が高くなり、排ガスも出る、それ以上に設備投



富士箱根ゲストハウスの前で（後列一番左がゲストハウス代表の高橋正美氏、後列左から5人目が高橋衛氏）

資等にかかるコストも膨大です。ということでそのような非合理的なことはやめてほしいという訳なのです。しかしドイツ人の考え方は、必要な物はお金を払ってでも作るべきであるという考え方を持っていますので、高速道路は必要です、では作るのにはどれだけかかるのでしょうか、200億円かかるのですか、どうぞその分増税して下さい、私どもは払います、その方が納税者である私たち国民は全体的に見て絶対得ですから、となるのです。この点は日本での「受益者負担」の例とは好対照と言えます。

また、自分自身が納税者であり、税金を払った場合に自分の町や国がどうなるかと考えるドイツ人の考え方に対して、お上から垂れ下がってきたものを何とかして上手くやって、税金はできるだけ払わないようにしよう、払った税金の用途についてはお上が勝手にやってくれる、自分には関係ないと考える日本人の納税者意識には大きな差があるようです。

#### ◆アメリカ野球のカウント方式

最後はアメリカでの話です。ベースボールの本場アメリカから渡ってきた野球は今や日本でも最もポピュラーなスポーツですが、カウントの仕方に違いがあります。アメリカでは「スリーボールズ・ワンストライク」と言いますが、日本では「ワンストライク・スリーボール」と言い、逆になっているのです。さて、これはどうしたことでしょうか。つまり、こういうことです。

アメリカ人がスリーボールズ・ワンストライクというのは、あくまでもバッターの日から見ているのです。即ち攻撃するバッターは一人で自己責任も自己メリットも背負って、次球をバッティングチャンスとして虎視眈々と狙っているのです。アメリカはメリット社会ですから、ここで良いバッティングをすれば昇給・昇格も夢ではない、だからそこでもしフォアボールで歩かされてもしたら、そのチャンスを奪った投手に文句を言ったりするのです。

一方、日本ではその逆で、ワンストライク・スリーボールというのはあくまでもピッチャーの日から見ているのです。ピッチャーから見るとワンストライク取ったけどスリーボールまでなってしまった、どうするか。通常の日本のピッチャーですと、よしこれはフォアボールを出したんでは申し訳ない、いいや、ど真ん中投げちゃえ、打たれても2つに一つだ、ボックスを信頼してやろう、とこうなる訳です。意識はあくまでも守る人、しかもチームワークで何かあつたら協同精神で行くということに置かれているのです。

アメリカから折角きた攻撃型・個人型のベースボールが、日本で守備型・協同責任体制の野球ということになってしまいました。日本の体制も、2度ほどアメリカ大リーグ型に直そうとしたようですが、日本人選手と観客のセンチメントに合わないとのことで、相変わらず日本式のまま残ったという訳なのでした。

（講演の一部を採録）

## ◇オーストラリアIC

### 〈ライフ・マターズ〉コースに参加して

ジェームズ・コーディネーター  
(オーストラリア、シドニー大学学生、日本語専攻)

本年の1月に夏休みを利用して約1ヶ月来日。IC会員のお宅にホームステイしながら、ICの活動に参加。お父さん(グレアムさん)も約30年前に日本で2年間教鞭を執りながら当時のMRA(現IC)活動に参加した。本年、9月からは日本語の勉強のために交換留学生として慶応大学で半年間学ぶために再来日する予定。

#### オーストラリアIC

オーストラリアICは僕の祖父の頃から続いているかなり大きなグループです。メインセンターはメルボルンにあり、アーマー(Armagh)という呼称で呼ばれ、ロブ・ウッド夫妻そしてフェトゥさんによって維持管理されています。またこのセンターは彼ら以外に、オーストラリア国内や海外からの仲間たちや家族、学生たちがやって来て滞在する場所です。特に若い人は、多文化大家族の一員になる機会を持つのですが、つまり研修コースやボランティア活動、さらにここアーマー・ファミリーを築くことに参加するよう求められるのです。

オーストラリアICは数多くの活動をしてきましたし、今もなお続けています。去年は、キリスト教徒とイスラム教徒の間の良い関係を促進するためにナイジェリアから遙々やってきたキリスト教の牧師とイスラム教の指導者をお迎えしました。最近では、ウィメンズ・ピース・サークルといって、全ての女性たちのために、共に集い、経験や対話を共有するための機会を提供する活動を行っています。

#### ライフ・マターズ・コース

オーストラリアICの主要なコースの一つが、アーマーに滞在する青年たちのためのライフ・マターズ(人生の重要な事柄)に焦点を当てたコースです。このコースは定期的に毎年2月初め頃開催されており、僕は去年参加しました。18歳から40歳までの18人ほどが9



プログラムの一環として自ら作曲した曲を演奏するジェームズさん(中央)とオーストラリアICの仲間たち

日間のコースのために世界中からやってきます。幅広いライフスキル・プログラムは、コミュニティ、精神的な成長、スポーツおよび創造力等の方面もカバーしています。

青年たちが自分自身の成長を学ぶことになるアーマーという場所は、自分がどこの出身であり、自分が何者であり、自分はどこへ行きたいのかというような自分の人生行路を見つめる環境を提供しています。異なるバックグラウンドを持つ各参加者は、信じられないほど豊かに変わった自身の価値観や人生経験を共有する時間を持ちながら、自分の人生における展望を広げ、同時に他の参加者の人生をよりよく理解するのです。

参加者たち同士が強い結束で結ばれるばかりでなく、参加者たちは先住民アボリジニー文化について学び、オーストラリアの家庭を訪れることでメルボルンのコミュニティの一員となり、さらにコミュニティ内のいくつかの奉仕活動をするまでになるのです。

青年たちは毎朝「静かな時間」に参加します。小さなグループに分かれて他の皆と共有する前に、まず自分の内なる声に耳を傾けます。精神的成長や諸々のワークショップはロッククライミング等のスポーツと歌や作曲などの創作活動と組み合わせてバランスよく行われています。

つまり、このコースは青年たちに生きていくためのスキルを向上させるきっかけを提供し、また地球規模のコミュニティの中で方向性を捜し求める機会を提供するものです。ここ数年日本人の参加者がおりませんので、これから参加してみたいと思っている方はぜひどうぞ。

日本での初めての体験

僕が日本に最初に来てまず驚いたのは、オーストラリア人の目から見ると、どの道路も非常に狭く、ビルだらけで、どこへ行っても混雑しているのを目の当たり

にした時でした。しかし、どこへいってもほぼ全ての日本人がフレンドリーに接してくれて、必要なときには他所から来た人にも進んで手を差し伸べてくれる姿勢に心打たれました。友人たちやICのチームの寛大さには本当に感謝しています。僕は日本滞在においてのハードスケジュールにはほとんどついていけなくなりましたが、日本人の方々は皆、リラックスして楽しくくつろぎ、お茶を何杯もおかわりしてはユーモラスに語らうのが何と好きなのかと感心しました。



ワークショップでの学び



チームとしてのパフォーマンス



オーストラリア先住民アボリジニーの文化について学ぶ



皆で楽しくロッククライミングのプログラム



◇参加者の皆さんには、さらに2週間延長して滞在するコースも用意されています。9日間のコースの費用は約535豪ドル(2009年2月現在)とかなりお手頃ですので、日本人の学生たちの参加をお待ちしています!さらに詳しくお知りになりたい方は、オーストラリアIC ([www.iofc.org.au/life\\_matters](http://www.iofc.org.au/life_matters)) または、ジェームズ・コーディネーター ([jamescordiner@hotmail.com](mailto:jamescordiner@hotmail.com)) まで直接どうぞ。

—ジェームズ・コーディネーター

## ◆インドICボランティア体験

# 新しい自分に出会ったインドでの生活

チェ・ヒジン (韓国)

1年程前、私はインド IC 国際センターであるアジアプラトー (Asia Plateau, 以下 AP) にボランティアとして5ヶ月程滞在することになりました。折よく日本とインド共催の国際会議がインドで行われ、日本の方々と同行することになりました。また会議後も、遺跡で有名なアウランガバードまで一緒に旅行をしました。その旅行を終え、APに一人で戻って、私ははじめて自分が今インドにいることを実感しました。新しい人々、新しい環境など私にとってはすべてが新鮮でした。

特に初めは英語があまり話せなくてきちんとしたコミュニケーションを取れずなかなか慣れませんでした。自分の深い考えがうまく表現出来ず、言葉の問題が私の心の大きな壁になりました。しかし突然ここで英語を母国語として使っている人はほとんどいないことに気が付きました。そして言葉が通じなくてもお互いに理解出来る‘ユニバーサル・ランゲージ Universal Language’についても考えてみました。それはまさに心の問題でした。言葉が通じなくても心を開くと真に自分が伝えたいものが自然に伝わります。このようなことを考えた途端私は言葉の問題から自由になり、そこでの生活を楽しむことが出来ました。

次の壁は気が合う人だけをそばに置こうとして、私と気が合わない人には無関心で対応することでした。親が子供に対する無条件的な愛と違って、無関心、無神経は相手を傷つけてしまいます。このようなことを感じて私は昔自分が人を傷つけたことや自分を変えたい気持ちを皆と話し合いました。APの皆は私に“自分と気が合わない人にもっと沢山の関心と愛情を注ぐこと、そして尊敬をすること”を教えてくださいました。私はまず最初は尊敬できるその人の良い所を見る’ という実践することから始めました。もちろん完全とは言えませんが、角が丸くなるように私も自分を磨いて行きたいと思いました。

また、実は私は世界の話には全然興味がありませんでした。ニュースで世界で起きた事件が流れても興味がありませんでした。仮にある問題が起きても私の



インド IC センター "アジア・プラトー" は周囲が緑に囲まれた静かな高地にある。インドのカトリ夫妻と。(中央がヒジンさん)

肌で感じられず、その問題に関心を持ったとしても何も変わらないと思っていました。しかしある日、APのインターン達とチベットの問題について討論をした中で、チベットから来たインターンの一人が‘ユニバーサル・リスボンシビリティ Universal Responsibility’ という単語を教えてくださいました。私達がこの世界で生きている限り世界で起きていることにはある程度責任を持たなくては行けないのです。私と関係がないとしても私達の前向きな心が集まればそれを変えられる大きな力になれることに私はようやく気付きました。その言葉は何日か私の頭から離れませんでした。

私は5ヶ月という短い時間をインドのAPで過ごしましたが、ここで今まで知らなかった自分のことを客観的に見ることに、また他人に対する思いやりを持つことを教えられました。私がぶつかった様々な問題に相談に乗ってくれたり、応援して励ましてくれたカトリ夫妻、そして各々違う背景を持った友達、私は毎日彼らから「愛」や「許し」「寛容」を習いました。

韓国に帰る前に、そこでの新しい決心と気持ちを忘れないように自分自身に手紙を書いて送りました。戻って読んでみたら私がそこでどんなにたくさんの経験をしたか、そしてどのような新しい自分を見つけることができたかが良く分かりました。若い時のこのような体験がきっとこれから私を導いてくれると信じています。



インド IC センターで活動する世界各国からのインターンやボランティアの仲間たち



## 《学生インターン＆ボランティア制度について》

国際 IC 協会では、インド IC 研修センターやスイス・コーでの国際会議の場でインターン生及びボランティアとして IC の会議の運営をサポートする活動を行いそのことを通して IC の精神や活動、語学などを学んでいく機会を提供しています。詳しくは (社) 国際 IC 日本協会事務局 TEL03-5429-1156 までお問い合わせ下さい。

## ◇◇◇ICニュース◇◇◇

### ■橋本徹前会長が名誉会長に就任

去る3月2日の第68回理事会で、橋本徹前会長が名誉会長に就任することが決まりました。

### ■国際理解と心の教育 学校訪問とホームステイ

今年も国際理解と心の教育を目的とした学校訪問プログラム、そして国際ボランティアグループの青年たちに日本の文化を理解してもらうためのホームステイを東京地区6/28(日)-7/10(金)の予定で行います。研修を受けた青年たち、ペノ・ヒエカさん(インド・ナガランド州出身)、パン・タンタムさん(ベトナム)、チェ・ヒジンさんとチョン・ジソンさん(韓国)、エマニュエル・ムティシャさん(ケニア)が東京の杉並や世田谷等の学校を訪問し、交流を深める予定です。東京地区の他、小田原、福岡、関西等でも活動いたします。学校訪問の受入やホームステイの受入先も募集しておりますので、詳しいことをご知りになりたい方は、IC事務局にご連絡下さい。

### ■各国でのIC国際会議のお知らせ (詳しい内容をご知りになりたい方はIC事務局にご連絡下さい)

□第32回 IC 国際会議 テーマ:「一人ひとりのリーダーシップが世界を変える ー共に生きる世界と私ー」

開催期間:6月5日(金)～7日(日) 開催場所:神奈川県三浦海岸、マホロバ・マインズ・アネックス

□第63回 スイス・コー IC 世界大会 総合テーマ:「持続できる世界にするための信頼と誠実さ(仮訳)」

開催期間:7月9日(木)～8月15日(土)\* 期間内に5つの会議が開催されます。

開催場所:スイス・コー、マウンテンハウス

□第15回 IC アジア・太平洋青年会議 \*18歳から35歳までの方々を対象とした会議です。

開催期間:8月1日(土)～9日(日) 開催場所:台湾

□第6回 IC 日中韓大学生フォーラム \*大学生・大学院生を対象とした会議です。

開催期間:8月(5泊6日、日程調整中) 開催場所:韓国、ソウル及び天安

□クリエイターズ・オブ・ピース国際会議 テーマ:「平和の文化を創造するために」

\* 平和の創造者として一人ひとりが出来ることを探る女性を中心とした会議です。

開催期間:9月30日(火)～10月4日(土) 開催場所:コラロイ会議場(オーストラリア、シドニー)

□コー・イニシアティブス・フォー・ビジネス(CIB) 国際会議

テーマ:「世界的危機から新しい経済秩序へー信頼と誠実さをビジネス慣行とするためにー(仮訳)」

\*2007年に続いての、インドと日本のIC協会の共催による会議です。

開催期間:11月20日(金)～24日(火) 開催場所:インド・パンチガーニ、ICセンター

#### 《入会のご案内》

当協会は皆様からの会費及び寄付金により運営されています。お寄せ頂いた浄財により内外の未来を担う青年たちの育成に寄与することを希求しております。ぜひご入会頂き、ICの活動にご参加・ご支援下さいますようお願い致します。お問合せはIC事務局TEL03-5429-1156までご連絡下さい。

《編集後記》 今号は相馬雪香前名誉会長追悼特集及び昨年10月に開催したミニHOHOのレポートを中心に編集させて頂きました。ミニHOHOは今秋にも開催される予定ですので、ご関心のある方はIC事務局までご連絡下さい。尚、本機関誌に関してご意見等がございましたら、(社)国際IC日本協会までお寄せ下さいますようお願い申し上げます。編集企画委員:高橋久子、長野清志、海老原真美